

図表・データ&会話文型小論文 (p.112)

※別の原因を取り上げて書く場合

最初と最後の段落で結論を述べることで(双括型)、論理的かつ説得力のある構成になっている。

妻が専業主婦の家庭における家事・育児の協力について、夫婦間の分担の認識の差を小さくし、いまだ日本に根強く残っている男性優位の風潮をなくすことが、現在の状況を改善する第一歩になると私は考える。

表の平成八年と平成二十八年を比べると、どちらの世帯でも妻の家事時間は減少する一方、育児の時間は大きく増加している。また、夫の家事・育児の時間は増加しているにもかかわらず、会話文からは夫が仕事を優先し、妻が比較的大きな比重で家事や育児を担っている現状が見えてくる。この二十一年間で夫が家事・育児に携わる時間は増えていくが、妻の育児時間は減っていないこと、また、会話文からわかるように、家事や育児の分担の比重については、夫婦間で認識に差が生じていること、背景に、日本古来の男性優位の考え方があり、それゆえに、出産は女性だけが体験できるものであり、それゆえに男性は女性と比べ、親になったという実感をもちづらさという。男性にも早くから親になる自覚をもってもらいたい。夫婦一緒に受けられる「赤ちゃん教室」を土曜日などの休日に実施する自治体が増えていくと、先日新聞記事で読んだ。専用のベルトを身につけて妊婦の不自由さを疑似体験したり、乳幼児のおむつ交換や離乳食作りを実践したりすること、夫が妻の大変さに気づき、家事や育児への参加率が上がる。このように、夫婦間の家事・育児に対する認識の差を埋めることで、より公平な分担が実現可能となるのではないかと。

以上のことから、私は、夫婦間の認識の差を小さくしていくことが、専業主婦家庭の家事・育児協力体制の改善につながると考える。なお、この実現には、政府や自治体、企業の積極的な支援も欠かせない。男性の育児休暇取得の促進や、子育て世帯の短勤務の推進など、子どもがいても働きやすい環境を作っていくことは、これからの社会において重要な課題である。

800

600

400

200

現代社会の課題を示しつつ、今後の展望を述べている。

新聞記事から得た情報をもとに考察している。

資料を読み取って分析した結果から、自分の考えを導き出している。